# 未来の図書館 研究所 第5回シンポジウム 記録



# 図書館とレジリエンス

日時 2020年11月27日(金)13:30~16:30

主催 株式会社 未来の図書館 研究所

# プログラム

13:30~13:50 シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

永田 治樹 (未来の図書館 研究所 所長)

13:50~14:30【講演】「名取市図書館における東日本大震災 からの復旧と復興」

柴崎 悦子 氏 (名取市図書館 館長)

14:35~15:15【講演】「情報支援とレジリエンス

~鳥取県立図書館の取り組みから」

三田 祐子 氏(鳥取県立図書館)

15:15~15:30 休憩

15:30~16:30 ディスカッション

●パ ネ リスト 柴崎 悦子 氏

三田 祐子 氏

●コーディネーター 永田 治樹

# 未来の図書館 研究所 第5回シンポジウム 記録

# シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

(永田)

第5回,未来の図書館 研究所シンポジウムの開会でございます。最初に一言,ご挨拶を申し上げます。

本年も、ご登壇いただく柴崎さん、三田さん、そして Zoom、YouTube でつながってくださっている皆さまのおかげをもちまして、このようにシンポジウムを実施する運びとなりました。今年はよもやということが現実となり、コロナ・パンデミックで本当に大変な年になりました。なお事態は収束に向かっているわけではございません。「ウィズコロナ」という妙な表現が日常になっております。しかし、まさにそうした困難なときにこそ、人々が孤立せず、十分に語り合える会合・シンポジウムが必要かと存じます。ただし、この状況では、皆で集まってお酒を酌み交わすことから生まれたシンポジウムの由来のように一堂に会することはできません。ウェブシンポジウムの形となります。手法に馴染みがなく、種々面くらうことも多そうですが、本日の機会を有効に活用し、なんらかの成果をつかみとっていただければと願う次第であります。まずは、ご参加いただいたすべての方々へ、御礼を申し上げ、ご挨拶にかえさせていただきます。

シンポジウムの進行の約束については、後ほどさらに説明申し上げますが、ここからはコーディネーターとして、私のほうから、今回のシンポジウムの趣旨について説明いたします。

未来の図書館 研究所のシンポジウムでは、これまで図書館の今後のあり方を展望するテーマを設定してきました。図書館がこれからの世界において、未来をどう確保するかという観点であります。継続してこの会合にご参加いただいている方にはご案内のところでありますが、少し説明いたしますと、これまで私どものシンポジウムでは人々やコミュニティの未来を確かなものにするための図書館活動と、もう一つ、図書館の未来を確かなものにするための図書館活動とを、議論してきました。この二つは、重なるものでありますが、視点に若干の違いがあり、前者は、図書館の社会的役割に目を向け、これまでのテーマでいえば、第2回の「図書館とソーシャルイノベーション」の場合のように、図書館が社会革新にどのように貢献するかを議論するものです。また後者は、図書館自体に焦点をあて、その未来を確保するために用意しなくてはならないことがらを議論しております。昨年度のテーマ「図書館とランドスケープ」は後者であります。図書館を今後とも人々に快適に活用してもらうためには適切なランドスケープ設計が必要だとしたものです。

今年のテーマ,「図書館とレジリエンス」でありますが,図書館自体がレジリエント,つまり,災害や混乱などの状況を乗り越え成長してゆくことと,また図書館が人々やコミュニティのレジリエンスを確保してゆくという二つの議論があり,双方にまたがるものですが,どちらかといえば,人々やコミュニティの未来を確かなものにするための図書館活動のほうに重心があるかもしれません。そのようにご理解いただければと存じます。

さて、今回のテーマ「レジリエンス」とは第3回のテーマでした「サステナビリティ」と並

んで、今後の世界を考えるための重要な概念であります。サステナビリティについては第3回 のシンポジウムで定義しましたから、おさらいではありますが、その際、「サステナビリティと は環境や経済、社会のバランスを考え、世の中全体を、持続可能な状態にしてゆく考え方のこ と」と定義していました。皆さんご承知のとおり、私たちの社会は産業革命以来の急速な発展 に重ねて、20世紀以降、経済成長に伴う人口の爆発、環境破壊などを進行させてしまいまし た。その結果、いまや人類が豊かに生存し続けるための基盤である地球環境には、限界がみえ てきました。状況は,持続可能なものか,サステナブルかという問題になってしまいました。 また、地球上にはなお多くの人々が決して十分な生存条件を確保できていない状況もあり、そ うした部分の人々を誰一人、置いてきぼりにせずに開発も進めてゆくという条件のもとで、わ れわれの生存を持続可能にしてゆく必要があります。国際連合、国連では、この状況を捉え て, このスライドにあるように 17 の目標を掲げ, 2016 年から 2030 年までの 15 年間にそれを 達成しようという計画を立てました。エス・ディー・ジーズ (SDGs: Sustainable Development Goals) という「持続可能な開発目標」です。いまや、サステナブルな社会を構 築することは世界的な合意でありまして、図書館界、その代表である国際図書館連盟(IFLA: International Federation of Library Associations and Institutions) もこれに賛同し、教育は もちろんのこと、さまざまな社会課題に関与しているところです。

それに対して、レジリエンスにはまだ耳慣れない感じもありますが、新しい概念といってよいでしょう。現代においては地球環境の急激な変化などもあり、温暖化などによる災害や大混乱を避けるのは難しい状況になっておりまして、サステナビリティとともに、変化への対応というこの概念がさしせまったものとして認識されています。ただし、この概念は非常に広い意味合いがありまして、経済学、生態学、政治学、認知科学、デジタルネットワークなどのさまざまな分野で議論されているものであります。ここに定義を示しておきましたが、上段のものはロックフェラー財団のもので、「個人、コミュニティ、機関、企業組織、及びシステムがどのような種類の慢性的ストレスや急性的ショックを経験しても生き残り、適応し、成長する力」とあります。また、下段のものは、後ほどちょっと触れるゾッリとヒーリー(Andrew Zolli & Ann Marie Healy)のものであります。いずれも個人やシステムの双方のレジリエンスを問題にしており、混乱などに遭遇しても、いいかえれば、新しい状況の変化があっても、それに適応し自己の目的を達成する力、対応できる力をいうものであります。

サステナビリティとレジリエンスは、現代社会において大切な二つの視点です。実はこの両者の関係については、さまざまな議論がありますが、ここでは、この図(図 1)のように、SDGs の目標にバランスをとりつつ、つまりレジリエンスを確保して、歩んでゆく、と捉えておきたいと思います。持続可能な開発目標を目指すなかで、襲いかかるリスクに対して、この綱渡りをしているご婦人のようにバランスを保つ、回復力、レジリエンスが必要だということです。また、サステナブルと思われる均衡点も事態の変化に応じて変動してゆきます。そうした状況に対応できることが不可欠なのであります。

# サステナビリティ (持続可能 性)とレジリエンス (回復力)

- ◆持続可能な開発目標 (SDGs) を目指す なかで、災害等襲いかかるリスクに対応 し、バランスを復元するカ
- ◆サステナブルと思われる均衡点は変動する。状況の変化に対応できるダイナミズムが必要



図1 サステナビリティとレジリエンス

次に、図書館界においてこれまでレジリエンスがどのようにとりあげられてきたかを少しみておきます。米国、アメリカでは、ハリケーン・カタリーナやサンディのあと、前者はニューオリンズ、後者はニューヨークを襲ったんですが、都市の復旧の大きな困難が図書館の問題としてとりあげられるようになりました。その意味合いは、ここに書いてある三つの点(①図書館は、政府とともにレジリエンス戦略に与する必要がある、②レジリエンスはコミュニティの関与が不可欠、その際に図書館は大きな役割を果たす、③レジリエンスは、公平性やアクセスという図書館の価値と合致するもの)に由来するものでありますが、少し端折っていえば、図書館はコミュニティのレジリエンスを支えるための格好の社会機関だという捉え方であります。

また、サステナビリティの後、その活動をしていたレベッカ・スミス・オルドリッチ (Rebekkah Smith Aldrich) という方が、小冊子などを著して、この活動を始めております。

もう一つは、これは 2015 年 3 月 14 日から 18 日にかけて仙台で開催された第 3 回国連防災世界会議に成果文書「仙台フレームワーク(仙台防災枠組 2015-2030)」というのがあるのですが、そのなかに「レジリエンス」という表現が出てまいります。具体的には、四つの優先行動のなかに一つ、「レジリエンスのための災害リスクの軽減への投資」というのがあり、それを受けた七つのターゲットでは、「2030 年までに保健や教育施設など重要なインフラへの損害や基本的サービスの破壊を、レジリエンスの開発を通じて、実質的に減らす」というような言葉が出ております。これをうけて IFLA、国際図書館連盟は、災害における図書館の役割というのに焦点をあてて議論を広げております。私は日本国内の図書館関係者の間で、この「仙台フレームワーク」についての反応は、あまり聞いたことがありませんが、ひょっとすると地元の柴崎さんはご存じかもしれません。

さらにもう一つ,これは、アメリカ図書館協会の企画ですが、今年レジリエンスの活動を行う図書館には、助成が行われております。図書館のプログラムでレジリエンスをとりあげていれば、一定の財政的支援があるのです。図書館界では、レジリエンスという問題について、な

お必ずしも大きな流れをつくり出しているわけではありませんが、非常に基本的な問題であり 見落とせないという認識が深まっているようです。

最後に、ここに挟みましたのは、上に参照したゾッリとヒーリーによって書かれた本のなかに あった指摘です(図 2)。レジリエンスを高めるためにはどのように議論したらよいか、個人、 社会、それぞれどのような観点で考えたらよいかということで、彼らの本にはこのスライドに 描かれてるような実践例がかなり盛られています。

ちょっと駆け足で解説をいたしましたが、シンポジウムの趣旨として、サステナビリティ、レジリエンスという概念、図書館界でのレジリエンスの動きというのをご紹介いたしました。 早速、お二方のご報告にうつりたいと思います。人々やコミュニティの未来を確かなものにする、レジリエンスに関わる図書館活動であります。まずは、名取市図書館の柴崎さまにご講

演をいただきます。



図 2 レジリエンスの議論のために:Zolli & Healy によるヒント

# 【講演】「名取市図書館における東日本大震災からの復旧と復興」

#### (柴崎)

皆さま、こんにちは。私は宮城県名取市図書館の柴崎悦子と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

名取市図書館は、現在は再開発された JR 名取駅前のビルのなかに入っている新しい図書館です。2018年の12月にオープンいたしました。その前は、東日本大震災で図書館が被災しましたので、6年から7年、仮設の建物でずっと運営してきました。今日私は、「名取市図書館における東日本大震災からの復旧と復興」というタイトルでお話しさせていただきますが、私の話は、これまで経験してきたことの単なる事例報告に過ぎないと思います。なぜなら自然災害は一つだけではなく、地震もあれば、洪水などの水害、火山の噴火、台風、山火事、いろいろな種類があって、そこからの立ち直り方も一つではないので、こういうことが起きたら、こうすれば大丈夫ですよ、元通りになりますよ、というような話ではないんですね。なので、私の話も、こういう図書館もあるんだ、とその程度に聞いていただければと思います。それでは、ここからはスライドをみていただきながら話を進めてゆきたいと思います。

まず、簡単に私の住んでいる名取市をご紹介したいと思います。私の住んでいる名取市は、 宮城県の中央部、仙台市の南に隣接しています。東は太平洋に面していて、形としては東西に 細長くて、海から山まであるという、そういうところです。面積はだいたい 100 平方キロメートルで、人口が8万人にちょっと欠けるくらいです。東日本大震災のときは、沿岸部の閖上 (ゆりあげ)地区、閖上というこの地名を聞いたことがある方もいらっしゃると思いますが、 閖上地区と仙台空港があるその下増田地区というところが、街がなくなるほどの壊滅的な被害 を受けています。

これが閖上の震災当日の写真ですね(スライド: 閖上地区の被災写真)。小学校の屋上から撮った写真です。これは仙台空港ですね、これも当日の写真です(スライド: 仙台空港の被災写真)。名取市の震度はこのときは6強で、津波の高さは9mといわれています。それから死者は、関連死も含めて923人と報告されています。

では、ここからは名取市図書館の、先ほども被災したといいましたけども、被災状況について簡単に説明させていただきます。名取市図書館は海から 6km 以上離れているので、津波の被害というか、水の被害は全然なかったのですが、建物がとても古かったんですね。この写真は昔の図書館ですね(スライド:旧館の外観写真)。名取市が市になった昭和 33 年に役所として建てられた建物です。市役所は昭和 50 年に別なところに移っているので、図書館は 51 年からこの建物を転用して使っていました。

これは図書館のなかの写真です (スライド:館内の被災の様子・カウンター)。カウンターの 後ろの棚が、こんな感じで倒れています。いまみると恐ろしい感じがしますが、幸いこのとき は蔵書点検中の休館で、利用者が誰もいなかったのが不幸中の幸いでした。

ちょっと恥ずかしいのですが、みていただきます。これが書庫のなかですが、このようにスチールの棚がみんな倒れました(スライド:館内の被災の様子・閉架書庫)。床固定はしてあっ

て、頭のほうも留めてあったのですが、やはりこのように倒れて本もたくさん落ちました。 それからこれは階段の写真ですが、壁が剥がれ落ちています(スライド:館内の被災の様子・階段)。ここだけではなくてすべての壁が、こんな感じで剥がれ落ちました。

これは、左側は一般開架の写真ですが、足の踏み場がないくらい本が落ちています(スライド:館内の被災の様子・開架フロアと会議室)。会議室、ここは物置にして使ってたところでしたがこんな感じで壊れました。

そして 3 月 19 日には応急危険度判定で赤紙が貼られました (スライド: 応急危険度判定の赤紙)。「危ないのでなかに入らないでください」という意味の紙です。

ここからは、私が自分で復旧期ってよんでいるのですが、その復旧期についてのお話をしたいと思います。どこからどこまでが復旧期かと考えているかというと、震災があったときから仮設の建物が完成して、震災前とほぼ同じようなサービスができるようになったときまで。 2013年3月までが名取市図書館の復旧期だと思っています。

これは復旧期の最後、木造の子ども図書室と、それから、カナダからもらった木造の一般図書室ができあがって2棟並んだところの写真です(スライド:どんぐり子ども図書室・どんぐりアンみんなの図書室外観写真)。

これは 2011 年 3 月 11 日の発災から復旧が終わったところまでの間に、どんな出来事があったのかを表にしたものです(スライド:復旧期の出来事を時系列に並べた表)。3 月 11 日に震災があって建物が壊れて、4 月に北海道の石狩市から復旧支援を受けて、5 月に臨時開館を始め、10 月に南館とよんでいたプレハブの建物を図書館振興財団からもらい、その後に日本ユニセフ協会から「子ども図書室」を、カナダから「どんぐり・アンみんなの図書室」をもらって、そして古い建物を解体して、駐車場の整備が終わったという流れです。

では、ここから写真をみながらどんな過程を踏んできたかを、ちょっと詳しくみていきたいと思います。先ほどいいましたように、2011年4月に北海道の石狩市から復旧の支援をもらいました。震災から2週間くらいたったとき、石狩市民図書館の方から「支援に行きたいんだけど」という電話をもらいました。このときはすごく大変な時期だったので迷いましたが、館内で相談して、結局支援を受けることにしました。そこから準備をして、受け入れ体制をいろいるとつくりながら、4月11日に石狩市の方々を迎えました。

実は、振り返ると、このときが一番苦しかったです。私たちは公務員なので、震災直後は、図書館の仕事よりも、むしろ役所の人間として動かなくてはいけなくて、避難所の運営を担当していたんですね。なので、震災から2週間目っていう時期がものすごくきつかったです。そのような時期でした。石狩市の方には、避難所に行ってもらったり、図書館のなかを片付けてもらったりしました。石狩市さんは3週間ほどいたので、前半と後半とでやってもらうことが違っていたのですが、後半はこのように臨時開館に向けての本の片付けなどの作業をしました(スライド:石狩市からの応援の様子・写真4枚)。

その後、先ほどもいったように 5月10日に臨時開館を始めました。建物のなかに利用者は入れない状態だったので、このように移動図書館車、BM(Bookmobile)の車庫のなかで、毎日パソコンと長机を持って行って貸し出しを行いました(スライド:臨時開館の風景・写真8枚)。建物のなかには、行くところがなかったので、私たち職員は入っていましたが。

あんまり楽しみがなかったので、夏は七夕飾りをしたり、水ヨーヨーを出したりして、ちょっとお祭りのような雰囲気をつくったりもしました。夏の間はよかったのですが、だんだん寒くなって、この後どうしたらいいのかと心配になってきた頃、図書館振興財団からの寄付の話をみつけたので、お願いしたところ、プレハブの小さい20坪の建物をもらうことができました。ちょうど寒くなる直前、10月の半ばに建てることができて、利用者をようやく建物のなかに入れることができました(スライド:南館の外観写真)。

これが建物のなかの様子です(スライド:南館の内観写真)。外でのときは、風が強かったので新聞を出すことができなかったのですが、ようやくこのように落ち着いて新聞を読めるような環境ができました。

その後、日本ユニセフ協会の資金援助で「どんぐり子ども図書室」を建てました。これが竣工したときの写真です(スライド:どんぐり子ども図書室の外観写真)。12月24日にできあがりました。ちょうどクリスマスのときにこのような素敵な木造の建物をもらうことができました。

「どんぐり子ども図書室」を建てるときは、宮城県図書館や saveMLAK が中間支援をしてくれて、日本ユニセフ協会につないでくれたり、東海大学の建築の先生につないでくれたりして、そのおかげでこのようなものができました。この写真は、上の左側はみんなで書架を組み立てている様子です(スライド:「どんぐり子ども図書室」準備作業とオープニングの写真・上段左)。書架は手作りです。右側は本を運び入れている写真ですね(スライド:「どんぐり子ども図書室」準備作業とオープニングの写真・上段右)。このようにして 2012 年の 1 月 6 日にお披露目をすることができました(スライド:「どんぐり子ども図書室」準備作業とオープニングの写真・下段)。私たちもびっくりしたのですが、オープンの当日はものすごい数の人が並んで待っていてくれまして、こんなにも図書館を待っていてくれる人がいるんだとすごく感激した覚えがあります。

それで、子ども図書室ができあがったので、次は一般の方、大人の方が入れるスペースが欲しいよねって思っていたところ、建築をしてくださった東海大学の先生から「カナダ東北復興プロジェクト」というのを教えていただいて、じゃあそれに手を挙げてみましょうか、となりました。名取市は、カナダと中学生の交流事業を行っていたので、カナダには縁があったものですから、手を挙げましたところうまく採択されました。それから1年ほどかかりましたけども「どんぐり・アンみんなの図書室」という建物ができました。「アン」というのは、『赤毛のアン』からもらいました。私たちは、カナダっていうと単純に『赤毛のアン』をイメージしたので。これがそのとき、できあがったばかりの「みんなの図書室」のなかの様子です(スライド:「どんぐりアンみんなの図書室」外観と内観写真)。ここの棚もみんなで手作りしました。このように「子ども図書室」のときは全国から延べ70名、「みんなの図書室」、このときはさ

このように「子ども図書室」のどさは全国から延べ70名、「みんなの図書室」、このどさはさらに多くの、延べ250名のボランティアの方々が集まってくれて、オープンに向けて準備をしてもらいました(スライド:「どんぐりアンみんなの図書室」準備作業とオープニングの写真・上段)。そうして2012年1月18日にようやくオープンすることができました。ものすごく寒い日でした(スライド:「どんぐりアンみんなの図書室」準備作業とオープニングの写真・下段)。ちょっとこの写真では寒さが伝わりませんが、とにかくすごく寒い日でしたが、外で式典

をさせていただきました。

これは先ほどもみていただいた写真と同じですけども、手前にあるのが「子ども図書室」で、奥にあるのが「みんなの図書室」です(スライド:どんぐり子ども図書室の外観写真)。駐車場も整備し終わって、古い図書館も解体し終わったというときの写真です。

復旧期といっているのはここまでで、震災から2年です。2年はいま思うと本当に短い。2年間で仮設の建物をつくり、サービスも震災前とほぼ同じようにできるようになりました。とりあえず「よかったよかった」ということで、前と同じように、また利用者の方に戻ってきていただきたいと思いながら運営していました。

これは復興期の最後,完成した名取市図書館の写真です(スライド:名取駅東口の複合ビルの写真)。再開発された駅前に、このように新しい図書館ができました。2018年の12月です。

これは復興期の出来事を表にしたものです(スライド:復興期の出来事を時系列に並べた表)。図書館サービスの完全再開が平成25年4月ではなく5月となっているのは、4月にはまだ職員が完全に戻ってきていなかったものですから。開館時間も元通りになって、完全に前と同じようになったのが5月でした。そして、先ほどもいったように、とりあえずは「前に来てくださっていた方に戻ってきてもらおう」ということで動き出したわけです。

その年、平成 25 年の年度末に、「復興交付金を活用して名取駅前の再開発をする」という話が出ました。名取市は、閖上地区など沿岸部の津波被災が当然大きかったのですが、名取駅前のほうは、地震被害がすごく大きくて、古くからのお店はやめてしまったり、更地にしてしまったりと、かなり元気をなくしていました。そこに元気を取り戻そうということで、「復興交付金を活用して再開発をしましょう」という話が持ち上がったのです。2013 年度末くらいです。

表の2段目,2014年,平成26年の11月に「新名取市図書館施設整備検討委員会発足」とありますが、今度は「新しい図書館つくる」という話が進み、市民や学識経験者の方々を入れて10人ほどの委員会を立ち上げました。そして、その年の12月に、『新名取市図書館整備基本計画』の改訂版を策定しました。実は名取市では、震災前から駅前に新しい図書館をつくるという計画がありました。駅前を再開発して移転するという計画が平成20年のときからあったので、すでに一度計画をつくっていたんですね。ただ震災を挟んでしまって、さらに何年も過ぎていましたので、少し見直しをして新たにつくったのがこの改定版です。

そして、平成 27 年には内装設計を行いました。その後、1 年ほど間が空きましたが、平成 29 年に本体工事の着手、内装工事の着手。それから平成 30 年には友の会が設立、平成 30 年の 10 月竣工、12 月にオープンという、このような過程をたどってきました。

ではここで、現在の図書館を、簡単にご紹介いたします(スライド:名取市図書館の紹介)。面積は約3,000 ㎡、収蔵能力は30万冊で、現在は21万冊ほどあります。座席数は約250 席です。開館時間は、火曜から金曜は朝9時から夜の7時まで、土日は6時までです。ここに書かれていませんが、実は早朝の開館も行っていまして、朝7時30分から、一部のエリア、「カフェコーナー」とそこから続く「新聞・雑誌コーナー」は朝7時30分から開けています。ただいまはコロナ禍で、カフェの営業時間が短縮されているので、早朝開館はお休みしています。普通のときは7時半から開いているので、通勤前にちょっと図書館に寄って、コーヒーを飲んだり、モーニングを食べたり、新聞読んだりして、それから出勤されるという人もいます。

この写真は館内の様子です(スライド:2階部分の館内写真8枚)。左上は入口ですね。駅の 改札からまっすぐペデストリアンデッキを歩いてくるとここに着きます。1分もかからないの で、とても便利なところです。なかに入るとすぐ左手にカフェコーナーがあります。下段の写 真は、入口の自動ドアから入ってなかをみたところですね。

奥に行くと児童コーナーになっていて、「おはなしのへや」などもあります。この「おはなしのへや」は結構広くて、おはなし会をゆったりとした感じで開催することができます。それから CD・DVD のコーナー、この近未来的な丸椅子がブースになります。ここに座って観ていただきます。さらにバックヤードにはこのようにボランティアルームもあって、ボランティアさんたちが常時活動しています。

ビルの 2 階 3 階が図書館なのですが、図書館の上の階はまた雰囲気がガラッと変わって、床はこのようなカーペットでシックな感じになっています(スライド:3 階部分の館内写真 4枚)。2 階 3 階と二つのフロアを使っているので、二つのフロアそれぞれにコンセプトがあります。2 階は「にぎやかなフロア」というコンセプトで、子どもや赤ちゃんが泣いたりしても大丈夫、カフェでお話ししても大丈夫ですよ、と。また床はフローリングで、暖かい雰囲気をだしています。静かに過ごしたい人は上へどうぞ、ということで「静寂のフロア」というコンセプトになっています。フロアの真ん中にこのようなアイランド型のカウンターがあります。奥には情報発信コーナー「名取の宝ばこ」というのがありますが、これは郷土資料を置いているところです。

設計で大事にした基本計画のメインコンセプトが、この三つのキーワード「やすらぎ・つどい・ひろがる」です(スライド:『新名取市図書館整備基本計画』メインコンセプト)。この三つのキーワードを大切にしながら設計しました。

これは図書館サービスの基本方針です(スライド:図書館サービスの基本方針)。先ほどの三つのキーワードはもちろん大事にしながら,基本方針,この五つの方針も大切にしました。このなかには,市民とか地域,そのような言葉を入れています。市民の生涯にわたる自主的な学習を支える図書館。地域の課題解決を支援し,まちづくりを支える図書館。学校・家庭・地域を結び,地域の教育力向上を支える図書館。地域文化を大切にし,新たな文化の創造を支える図書館。情報と人,人と人とをつなぎ市民と共に歩む図書館。市民や地域ということを特に大事に考えました。

これはワークショップの写真になりますね(スライド:平成26年度「ライブラリーミーティング」の写真4枚)。上の2枚は、最初に行った「ライブラリーミーティング・ヤングセッション」というワークショップです。2014年の9月に開催しました。高校生、大学生の若い人たちを対象にしたワークショップでしたが、このときのテーマは「私たちが還りたくなる図書館」。進学とか就職で、いったん名取を出て仙台とか東京などいっても、戻ってきたときにまた「図書館にいってみたいな」っていう、そんな図書館ってどういう図書館だろうということを、若い人たちに考えてもらいました。このときには本当におもしろいアイディアをたくさん出してもらいましたが、そのなかのいくつかはいまの図書館に反映されています。

下の写真は「出張ライブラリーミーティング」というのを行ったときの写真です。2015年の2月に1ヶ月ほどかけて、名取市内19ヶ所でライブラリーミーティングを開催しました。公民

館が 10 館と、そのときはまだ仮設住宅がありましたので、仮設の集会所。そういうところを回って、皆さんとお茶を飲みながら、図書館についていろいろ話し合いをしました。このときには、考えさせられることがすごくたくさんありました。公民館に集まってくださった方は、「名取市の図書館が新しくなりますよ」って呼びかけて来てもらったのですが、それぞれに皆さん意識の高い方ばかりで、厳しいご意見も頂戴しましたが、図書館の建設に関してものすごく前向きなご意見をたくさんいただきました。反対に、仮設住宅で行ったときには、たまたまそこにいた方に集まってもらったという形だったので、図書館を知らないという方がほとんどだったんです。図書館のなかにばかりいると他がみえなくなって、みんな図書館を使っているんだ、と錯覚していたところがあったと思うのですが、冷静によーく考えてみると、名取市民約8万人いますけども、実際使ってる方って1割とか2割とか、本当に少ないはずなんです。ほとんどの方、多くの方は図書館を使わずに生活をしている。図書館というものをよく知らないという方がたくさんいるんです。特に仮設に住んでいる方は、図書館を全然知らない人が多かった。「図書館って難しい本しかないんでしよ。」とか、雑誌があるっていうことをお話ししただけでびっくりされたり、ただで本を借りられるっていうことをいっただけで、「え?そうなの」っていわれたり。「あー、そうなんだ」って改めてそのとき感じました。

そのようなワークショップもやりながら、新しい図書館ができる前年度に友の会の立ち上げっていうのを視野に入れたライブラリーミーティングを開催しました。「名取市図書館と協働してなにができるかを考えてみましょう」ということで行ったのが、このライブラリーミーティングです(スライド:平成29年度「ライブラリーミーティング」)。3回開催しましたが、たくさんの方が参加してくださいました。この3回のライブラリーミーティングが終わったあと、このワークショップに参加してくれた方のうちの何人かが発起人となって、友の会設立の準備会を立ち上げて、数ヶ月かけて設立に向けての準備を行い、5月に正式に友の会が発足しました。このときも、参加された方もそうですが、私も本当にすごくたくさんのことを学びました。

このようなことを行いながら、2018年の12月19日に新しい名取市図書館がオープンしました(スライド:新図書館オープン記念式典の写真)。ビルのグランドオープンに合わせて図書館を開館するということでしたので、10月31日に引渡しを受けてから、2ヶ月弱で開館しなくてはいけませんでした。ものすごく大変でしたが、頑張ってやりました。オープンの日はすごくいい日で、天気がとてもよかった、ということが思い出されます。

この辺でまとめに入らなくてはいけないのですが。まとめとして、「震災からの復旧・復興を後押ししたもの」と書きましたが、ちょっとうまい言葉がみつからなくて。復旧・復興のプロセスはこれまでご紹介したとおりなのですが、そのベースとなったもの、私たちのやってきたことを後押ししてくれたものっていうのがあって、そのベースがあって、いろいろなことが実現してきたわけです。それで、そのベースとは一体なんなのだろう、と考えて書き出してみたのが、この三つです(スライド:震災からの復旧・復興を後押ししたもの)。「柔軟で、かつ楽観的、希望的な考え方」、「新たなつながりとコミュニティ形成」、「目標を達成したときの喜び」。漠然としているので、一つ一つなぜこのように思ったのかをお話しします。

まず、「柔軟で、かつ楽観的・希望的な考え方」。いま振り返ると、当時、私たちは強いこだ

わりというものをあまりもっていなかったような気がしています。直感的にいい話だと思えばすぐに飛びついたし、あるいは「もうこれダメ」と思ったらすぐに諦めました。「楽観的・希望的」と書きましたけれども、それは私たち職員がみんなそんなキャラクターだったからなのか、それとも、もう建物を失ってしまうっていう、どん底までいってしまったので、あとは上をみるしかないと思ってそのようになったのかわかりませんが。結果的にすごく楽観的だったなと思います。

これまでお話しした事例のなかにはなかったのですが、一つご紹介したいと思うことがあり ます。これは私が「名取市図書館の復興の歩み」みたいなお話をさせてもらうときに、あんま り言ってこなかった話で。どちらかというと「建物ができました」,「新しい建物をつくってこ うなりました」,ということばかりで,あまり話したことがなかったことなのですが,実は「ど んぐり子ども図書室」をつくっている最中、本当に建てている最中の11月に、「図書館絆まつ り」というすごく大きなお祭りを開催しているのです。そのときは震災から6ヶ月とか7ヶ月 とかというときなんですが,そのときまでに,もうすでにいろんな方からものすごくたくさん の支援をもらったので、そういう支援してくれた人たちに感謝しましょう、感謝の意味を込め たお祭りを開催しましょう、と行ったものでした。支援してくれた方に「お祭りするから一緒 にやりませんか?」っていったら、皆さんすごく喜んで、本当に遠いところからも駆けつけて くれました。例えば、札幌からは在アメリカ領事館の職員さんが来てくれて、子どもたちに英 語でおはなし会してくれたりだとか、石狩市の飲食店グループの人たちが来て、石狩鍋をつく って振舞ってくれたりだとか。それから、一番大きかったのは、東京 FM の方々が女優の室井 滋さんに声をかけて呼んできてくれて、室井滋さんのおはなし会をすることができたんです ね。あとは、東京のほうからアニマシオンをやっている方も来てくれましたね。そんなふうに 遠くから来てくれた方もいましたが、同時に名取市内で図書館を想って活動しているお話のグ ループの方々も参加して、おはなし会や工作をしたりと、2日間かけて、市の文化会館をほぼ借 り切って開催しました。2日間で延べ1,200人ぐらいの方が来た大きなお祭りを,「どんぐり子 ども図書室」をつくっているときにやった、そんなことがありました。

このお祭り、実は「最初にやりたい」といってくれたのは石狩市の図書館でした。そのとき、このアイデアにすぐ飛び乗ったっていうのも、私たちはきっと楽観的だったんでしょうね。どうにかなるだろうという考えだったから、このようなお祭りを成功させることができたんだろうなと思います。この成功体験が、後々の私たちの活動に影響を及ぼしてくれたと思っています。この大きなお祭りが成功したということが自信になって、「子ども図書室」、カナダからの「みんなの図書室」につながっていったのです。

次の「新たなつながりとコミュニティの形成」というのは、もちろんボランティアのことをいっています。全国からたくさんのボランティアが来てくれて、日本全国にもたくさんのつながりが生まれました。全国あちこちで活動している図書館関係者の人とつながることができたので、新しい図書館をつくるとき、つながりができた方々からたくさん協力をもらうことができました。すごくありがたかったです。また、名取市以外の全国の方だけではなく、名取市民の方々との新たなつながりというのもできました。これはどういうことかというと、市民ボランティアさんのことです。先ほど友の会ができたという話をしましたが、この友の会、もとも

とは、震災後に私たち職員が少なくなって大変だったときに、自然発生的に集まってくださった方々が始まりなんです。その自然発生的に集まってくれたボランティアの皆さんがグループになって、それがいまの友の会に結びついているのです。そういうわけで、「コミュニティの形成」と書いています。

「目標を達成したときの喜び」というのは、一つ一つのことを達成したときの喜びがモチベーションになって、復旧・復興してきたと思っているんです。実は先日、永田先生から、「復興を進める上での六つのポイント」というのをご紹介していただきました。私この六つのポイントをみせていただいたときに、共感というか、ものすごく実感するものがありました。どういうものだったのかというと、「どこに行っても通用する処方箋はない」、もう本当にそのとおりだと思いました。それから「災害が社会のトレンドを加速している」、「復興が従前の問題を深刻化させて噴出させる」、「復興の過程でコミュニティの力をどう引き出せるか」、それから「復興で用いられた政策は過去に使ったことのあるもの」、「復興に必要な四つの目、 $+\alpha$ 、バランス感覚」。私、すごく納得できました。冒頭でもいったように、私がこれまでに経験してきたことは、同じようにやったからといって、元通りになれるとか、復興できるというものではないんです。もしこれから、なにかに備えるというときには、この六つのポイント(世界の災害復興事例からみた「災害復興の6法則」(加藤孝明))っていうのも、知識として押さえておくことも必要なんじゃないかな、ということを感じました。ということで、私の今日の話はここでおしまいにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

# (永田)

ありがとうございました。それでは次に鳥取県立図書館の三田さんにお話を承ろうと思いま す。ご用意ください。質問等はチャットに入れていただくとありがたいです。

# 【講演】「情報支援とレジリエンス ~鳥取県立図書館の取り組みから」

(三田)

皆さま、こんにちは。鳥取県立図書館の三田と申します。よろしくお願いいたします。私からは、「情報支援とレジリエンス」というテーマでお話をさせていただきたいと思います。

まずこちらのスライド(図3)ですが、鳥取県立図書館のサービスについて簡単に表にしたものになっております。公共図書館ですので、小さなお子さまから、そして高齢の方まで、利用の対象というのは大変幅が広いということになります。例えば小さなお子さんであれば、児童サービスがありますし、また中高生の方であれば青少年サービス、高齢の方であれば高齢者サービスがあります。また、子育て世代には子育て応援サービスというのがあります。利用者の年齢に対応したサービスではなく、課題解決に対応したサービスというふうにみれば、ビジネス支援サービス、医療・健康情報サービス、法律情報サービスといったサービスもあります。本日はこういったもののなかからピックアップし、事例を紹介させていただきます。

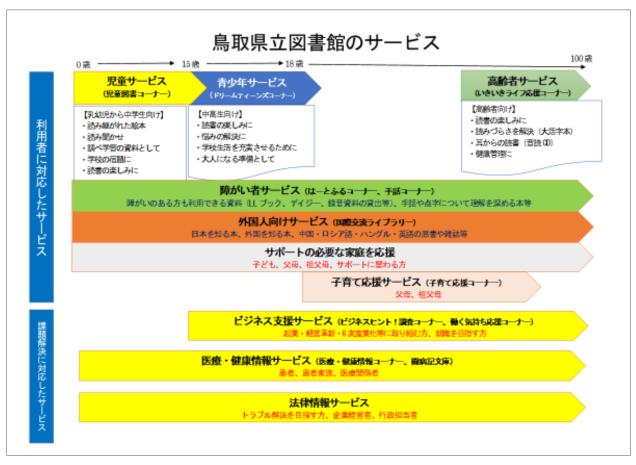


図3 鳥取県立図書館のサービス

今回テーマをいただいたときに、(いろいろと本をみながら) ちょっと気になった文章がありましたので、皆さまにご紹介をさせていただきたいと思います。これは熊谷晋一郎先生という小児科医の先生が書かれた文章のなかの一文です。熊谷先生は、生後間もなく脳性麻痺により手足が不自由でいらっしゃって、現在は当事者研究に取り組んでいらっしゃる先生です。この先生が、自立ということについて、このような文章を書いていらっしゃいます。「多くの人が自立と呼んでいる状況というのは、何物にも依存していない、そういった状況ではなく、依存先を増やすことで、一つ一つの依存先への依存度が小さくなる。そしてあたかも何物にも依存していないかのような幻想を持っている状況なのである」(熊谷晋一郎「第4章 依存先の分散としての自立」『知の生態学的転回 第2巻』東京大学出版、2013) ということです。自立ということを考えたときに、依存先を増やすことなんだということが、図書館にもあてはまるんじゃないかなと、勝手に私のほうで理解をしたところなんです。

おそらく私たちはなにか困難に直面したときには、乗り越えるために多様な選択肢を必要とするということはあるように思います。この「選択肢」の部分が、図書館を使っていただく、そういうことにも置き換えられるんじゃないかなと考えました。

そこでですが、図書館サービスのなかで重要な機能であるレファレンスということについて、少し考えていきたいと思います。事例を紹介します。

「図書館で夢を実現しました大賞」というのは、鳥取県立図書館で平成25年度から企画、実施をしているものです。2年おきに平成25年度、平成27年度、平成29年度、令和元年度に実施をしておりまして、図書館のビジネス支援機能、例えばレファレンスを使うとか、あと図書館で開催されているセミナーに参加をする、また相談会に参加をする、といった場面を利用していただいて、起業、商品開発、技術開発、経営改善などに成功した事例を募集するというものです。応募いただいた方のなかから最優秀賞・優秀賞を決定させていただきまして、その方々には、その成功までのストーリーを漫画にしてプレゼントしよう、そういった企画になっております。これまでの受賞作品については、鳥取県立図書館のホームページ

(https://www.library.pref.tottori.jp/business/cat/cat6/) に掲載しています。

そのなかから今回二つの事例を紹介させていただいております(図 4)。まず、こちらの左側の事例ですが、(https://www.library.pref.tottori.jp/business/earthway\_s.pdf) 生ゴミ処理機の開発をされている方の事例です。この方は、20年ぐらい改良を重ねて高性能の生ゴミ処理機を製造されています。高性能だということもありまして金額もかなり高い。この生ゴミ処理機をどういうふうに販売していこうかと販路について悩んでいらっしゃるという状況です。ご家族の方がたまたま図書館を訪ねてこられて、そのときに図書館でビジネス支援をやっているらしいとお聞きになる。そして、半信半疑ではあるけれども相談をしてみようということですね、図書館の利用が始まります。そのときに対応した図書館の司書が家庭ゴミの減量に取り組む自治体の情報をインターネットで探すなどして、この方にご覧いただいた。ちょうどそういった情報が欲しかったということで非常に喜んでいただいて、次の販路開拓の一歩を踏み出していかれる、という流れになります。たまたまですが、そのとき県立図書館にテレビ取材の依頼もきていまして、出演をお願いしたら「わかりました」と快諾いただきました。全国ネットのテレビだったので、すごく反響があって、販路がさらに拡大してゆくという流れもありました。

# 図書館で夢を実現しました大賞



図4 図書館で夢を実現しました大賞:第2回(左),第4回(右)最優秀賞

そして,右側の事例は、コーヒー豆の販売

(http://www.library.pref.tottori.jp/business/02.pdf) をされていたのですが、豆以外の商品はないですかというような問い合わせを受けて、そこから商品開発でもしてみようかなと行動を起こされます。そして図書館にお越しになって、ニューヨークで流行しているクラフトチョコレートの情報を得られます。カカオ豆を自家焙煎して砕いて、砂糖を加え成形まで行う Bean to bar というもののようですが、それについてすごく興味をもたれます。製造方法から、どんな道具が必要なのか、あとパッケージデザインどうしよう、というような話にどんどん進んでゆくわけですが、最終的には商品化に結びついた、という事例となっております。おそらくこうい

った利用者の方は, どちらの図書館にもいらっ しゃるものだと思います。

いまの話を少し整理してみると(図5),まずなにか困難や課題に直面する。それを解決するために、この方は図書館を使っていただいた、そのときに図書館の情報提供で解決のヒントがみつかり、そして新たな一歩に進んでいく。これがレファレンスで満足していただいた結果なのかなと私自身は感じています。

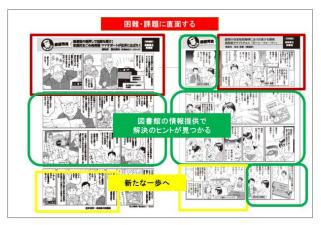


図5 課題,解決のヒント,新たな一歩へ

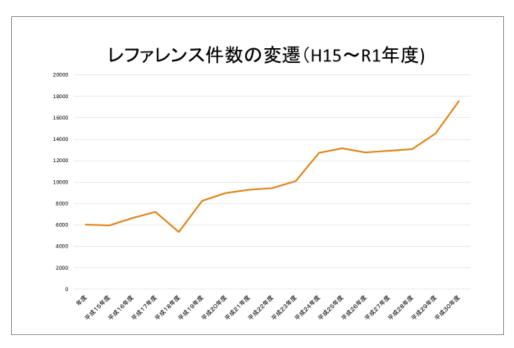


図6 レファレンス件数の変遷

当館でも年間 1 万 8,000 件近いレファレンスを受けておりますけれども、レファレンスの件数の変遷をたどってみました(図 6)。平成 15 年から令和元年度の統計をとってみると、最初すごく少なかったのが近年増えてきているというような現状をみることができます。

ではそこで、なぜレファレンスの件数が増えたのかと考えると、おそらく私が思うには、きっかけは、課題解決型サービスを始めたことが原因の一つではないかなと思っています。平成 16 年度にはビジネス支援サービスを始めました。平成 18 年度には、医療・健康情報サービス、法律情報サービスといった課題解決型サービスをスタートさせてきております。そのときの私たちの課題意識として、住民の方、県民の方々に図書館の機能は十分に理解して使ってもらえているだろうか、という思いがありました。つまりは、本が好きな人っていうのは図書館を利用してくださっているのですが、実は図書館の機能ってそれだけではないということは案外知られてないんじゃないかなと。例えば、図書館に読みたい本がなかったとしても、リクエストができるということや、また、市町村の図書館の利用者の方であっても、県立図書館の本が利用できるというような、いわゆる基本だと思っているようなことすら、知られてない可能性もあります。鳥取県立図書館では県内の市町村立図書館に依頼を受けてから 2 日程度で本が届く仕組みっていうのをもっています。そういうことも強みだと思うのですが、そういうことをもっと知ってもらいたいなと思っておりました。そしてもう一つは、やはりレファレンスです。課題解決型サービスを始めていく上で、やはり図書館の武器はレファレンス。「もっと聞いてください」「使ってください」と PR していかなくてはいけないなと思っていました。

そこで、情報を求める人が欲しい情報を得られているのかが、一番大きな課題であり、クリアしなくてはいけない問題だと感じています。

# 鳥取県の現状より

鳥取県統計課:鳥取県の推計人口:年報(令和元年10月~令和2年9月)より

	年少人口 (~14歳)	生産年齢人口 (15歳~64歳)	老年人口 (65歳~)	総数
令和2年	112,854	300,465	177,979	551,402(%)

(※)年齢不詳があるため、年少人口、生産年齢人口、老齢人口の合計が総数ではない。

	令和2年
20代	42,976
30代	56,156
40代	72,881
50代	65,951
	237,964

20代から50代が人口の約43%を占める。 65歳以上の人口は約32%を占める。

図7 鳥取県の現状

ここでちょっと最近のデータではありますけれども、鳥取県の現状をお示ししたいと思います (図 7)。現在のところ、人口 55 万人です。20 代から 50 代という年齢に注目したところ、だいたい人口の 43%を占めています。じゃあ 65 歳以上はどうかというと約 32%を占めています。実はこの 20 代から 50 代というのは、例えばですね、ビジネス支援サービスということを考える上では、だいたい中心となってくる年代、ターゲット層にあたるかなと考えます。こういう世代の方々に図書館として本当にアプローチできているのだろうか。どういう情報が必要とされていて、その情報を提供できているか、ということを改めて考える機会になりました。それは課題解決型サービスをスタートさせる上では、この年齢構成も考えて(参考にして)スタートさせたところでもあります。

働く人たちはどうやって情報を集めているのだろうと思い、探してみました。例えば、『中小企業経営者の経営情報の収集・活用に関する実態調査』があります。2013年に中小企業基盤整備機構によって調査をされたものです。「経営に必要な情報を誰から取得していますか」という問いに対して、同業者、取引先の担当者、顧客、自分で調べるというような項目が挙がってきています。年間売上高が大きくなるにつれて、従業員、または自分で調べるというような項目が増加してきているというような傾向がみられます。では、「どのようなメディアから情報収集しているか」というと、新聞・テレビ・雑誌・ホームページというようなものが挙がってくる。日常的に業務を通じて入ってくる情報が大変大きなウエイトを占めていること、新たな経営手段を求めて情報収集をされる場合、異業種の交流会に参加するなど、そういう方法で情報を集められているということ。また新聞や雑誌、書籍という紙媒体でのメディア活用というのは、年間売上高が、規模が大きくなるにつれて活用が増えてゆく傾向にある。ということは年間売上がそう多くない企業様にとっては、そこまでの情報収集はできていないのかもしれないなというふうに、ここからも感じることがありました。

そして平成 28 年度には、『中小企業・小規模事業者の成長に向けた事業戦略等に関する調査』がありまして、このなかでは、「製品サービスにおける市場ニーズの把握に向けた取り組みとして、最も効果が高かった取り組みはなんですか」という問いがあります。そのなかで、テレビ、新聞、業界専門誌、インターネットによる情報収集、官公庁や業界団体、支援機関等が発表する統計レポートによる分析がとても効果が高かったと回答された方は全体の約 18%を占めています。これを多いとみるのか、少ないとみるのか、ということかなとは思いますが、これらの情報は十分に図書館でもサポートできるものだと思います。むしろ、図書館を活用していただければ、もっとたくさんの情報を提供できたのかもしれないと思うこともあります。

これらの調査から、やはり潜在的なニーズはありそうだなと、文献を調べる、情報を調べる、図書館ができることはまだまだあるんじゃないかなと思いました。ただ、「図書館をどんどん使ってください」といったとしても、利用される方には具体的なイメージがまったくわかないということもあると思います。そこで始めたのが「図書館から情報を発信していく」という視点です。待っていても来ていただけないのなら、発信をしてゆきましょう、出かけてゆきましょう、という視点です。

ターゲットをある程度明確にして、情報を見える化してみようという取り組みですね。

(館内には)「働く気持ち応援コーナー」がありますが、リーマンショックでリストラされ、 急に職を失うことが社会問題となりました。この時期につくったものになります。例えば、急 に職を失ったときに、資格を取得して、次の職を目指そうという方のために資格取得のための 問題集を入れました。また、面接の受け方、ビジネスマナー、賃金について、といったよう な、働くことをテーマにした 24 のテーマを設定して本を集めています。

また、「ビジネスヒント!調査コーナー」は、おそらく公共図書館のイメージを変える棚だと私は思っています。こちらに並んでいるのは、東京商工リサーチであるとか、帝国データバンクといった信用調査会社が出している会社情報ですね。また、起業しようとした場合には市場動向を調べることがよくあるのですが、いろんな業界の市場動向を調べられるような専門的な資料も購入するように意識をしています。また、未来予測、1冊20万円程度する資料もありますが、そういったものも購入しております。1冊10万円以上の市場調査レポートなどもよく利用される資料となっています。なかなか一般の書店では並ばない、そういった資料がここに来ていただくとみていただける、もしくは借りていただけるというような状況をつくっています。レファレンスのことも少し触れたのですが、(こういうコーナーをつくってからだと思います)こういう本があるのなら、こういう相談をしてみてもいいかもと思われる方もあるようで、質問も専門的なもの、市場動向を調べたいというようなご相談をいただくようになってきました。

一番最近につくった棚、今年つくったものですけれども、新型コロナウイルスの影響を受けた県民の皆さまが活用できる助成制度、また相談事業を紹介したパンフレット、これらはすべてインターネットで紹介されていたりするものなんですが、インターネットに上がっていてもなかなか情報にたどり着けない、そこにそういう情報があるとはわからないという方もいらっしゃると思いましたので、紙で印刷したものを棚に設置しました。



図8 とリサーチギャラリー

ちょっとまた変わった棚もつくりました。「とリサーチギャラリー」(図 8)というものですけれども、図書館のカウンターにはいろんな相談が寄せられます。その相談事例を紹介したものです。この「とリサーチ」という名前は、県民の皆さんと図書館との共同作業であるレファレンス、アイディアとリサーチの出会いという意味を込めまして、「とリサーチ」という名前をつけました。ここには、いろんな相談事例をわかりやすくみていただけたらということで事例を紹介しています。「ハヤブサイダー」という商品ですが、鳥取県の特産の二十世紀梨の果汁を使ったサイダーがあります。「地サイダー」に関する本をお探しで、図書館に来られて、新聞記事を探されたり清涼飲料水の業界情報を調べられたりして、この商品をつくられました。「隼(はやぶさ)」というのは実は鳥取県のなかにある小さな地域ですが、若桜(わかさ)鉄道に隼駅という駅があります。この「はやぶさ」は、バイクとか詳しい方だとスズキのバイクで「ハヤブサ」というのがあると思いますが、そのスズキのバイクのハヤブサの聖地ともいわれています。年に1回その隼駅にハヤブサが集結するお祭りがありまして、「隼駅まつり」っていうのがあるんですね。今年度は新型コロナのために実施はできなかったようですが、昨年度で第 11 回目を数えておりまして、なんと 2,300 台のバイクが集まった。この隼駅とコラボした、このご当地サイダーということになります。

そのように申し上げると、「ちょっとこんなことで聞けないかも」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、あの棚のなかには、例えば「カラスが石鹸を食べるって本当?」という質問もありましたよとか、いろんな質問に対してお答えできますのでどんどんご相談くださいということで、いろんな事例を紹介させていただいています。

そして、次に図書館の機能を紹介するということですが、先ほども少し触れたのですが、や はり図書館では常識だと思っていることでもまだまだ知られてない、意外と図書館の機能をご 存じないということが多いんじゃないかと思います。例えばレファレンスもそうですが相互貸 借,文献複写といったことも知られていないと感じています。そこで,図書館で待っているだけじゃなくて図書館から飛び出してみましょうということで出かけて行って図書館をPRするという活動をしています。商工会議所が主催されている「創業塾」。起業を目指す方,創業を目指す方が集まって勉強される,そういった機会なんですが,ここに図書館から出向いて行きました。例えば事業計画をつくるときには必ず業界動向の分析が必要となると思います。そこで事前に創業されるテーマ,予定をされているテーマをお聞きして,参加者に合った本を持って行くなどしています。当館で契約をしているデータベースは,この場で検索をしてプリントアウトできるようにパソコンも持って行きました。例えばですね,商圏分析,エリアマーケットの分析ができるデータベースと契約をしております。「市場情報評価ナビ MieNa(ミーナ)」というデータベースがあるのですが,このデータベースを使えるように,一緒に(パソコンを)持って行っております。ここでプリントアウトができるようにプリンターも持参しています。本のコピーも図書館と同じようにすることができます。プリントアウトしたらお渡しするのですが,お金をいただかなくてはいけませんので,レジも持って出かけて行って図書館の機能も説明させていただきます。質問にもお答えして,この創業塾のなかで人間関係をつくって,また後日相談されたいということであれば,ぜひまたご連絡くださいとご案内をしています。

レファレンスは(図書館では相談)カウンターでお受けしております。図書館の資料を使うとか、インターネットデータベースを使うということももちろんありますが、もう一歩踏み込んで、アドバイザーの方、専門機関の方を紹介するということもあります。関係機関との連携というのを強化すること、つながるということは非常に重要だと思っています。図書館に来ていただいた方に、図書館で専門家による相談会も受けていただけるように、月1回は特許相談会、中小企業診断士による経営相談、日本政策金融公庫による融資相談などの相談会も実施をさせていただいています。このような活動を続けてゆくなかで、図書館のレファレンスは、先ほども少し触れましたが、内容が変わってきた、高度化したのかなと思うこともあります。

次に、対象を変えた事例を紹介させていただきたいと思います。こちらの調査は3年に一度実施をされているものですが、全国の医療施設を利用する患者を対象に、医療に対する満足度を調査するというものです。平成20年の調査では病院の選択で情報が「必要であった」と回答した患者さんのうち、情報が「入手できた」と回答した患者さんは実は2割以下っていう結果が出ています。お医者さまなどの専門性や、経歴についての情報を調べたかった方が48.5%、そのうち入手できた方は14.7%、検査や治療方法の詳細について情報が欲しかった方が47.7%、そのなかで入手できた方は13.3%というのが実情でした。こういう状況であったというのは、私はかなりショッキングに感じました。そして平成29年にも調査は行われておりますが、同じ項目がありません。「普段、医療機関にかかるときの情報の入手先」について尋ねている問いがありましたので紹介させていただきます。「情報入手している」という方、外来の患者さんで77.7%、入院の患者さんでは82.6%で、どこから情報を入手しているかというと圧倒的に、「家族、知人、友人の口コミ」が多いというのが現状です。すべての世代でだいたい7割程度が口コミで病院を選ばれているということになります。65歳未満の方は、インターネット情報を活用されており、65歳以上の方は窓口の情報、相談窓口による情報によって医療機関を選択されているというような状況がみえてきます。先ほどみていただいた平成20年、そして平成

29年と調査がありますけれども、こういった調査をみても、医療機関にかかるときも、やはりなにかしらの情報というのは皆さん求められていることはわかります。これからまた治療に進んでゆけば、また更なる情報を欲しいと思われる方も多くいらっしゃるのではないでしょうか。

これは鳥取県立図書館のなかの「医療・健康情報コーナー」を撮影したものです(図 9)。インフォームド・コンセント、セカンド・オピニオンということがいわれますが、本当に自ら情報を入手して評価判断するための情報というものは、皆さんが十分に得られているのかは(先に紹介した)調査からも感じることがあります。こちらのコーナーのなかには、入門書、病気についてわかりやすく書かれた本というのはもちろんありますが、コ・メディカルの方、医療従事者の方が使っていただける資料まで集めるように配慮しています。現在は看護師さんの利用も非常に多くなっています。また治療・診療について考える際に重要な資料だと思います、診療ガイドラインも積極的に集めるようにしています。医療情報については古い情報というのは特に気をつけて除架をするようにしていまして、だいたい出版後、5年程度経ったものは書庫に下ろしています。カウンターにいるといろんな質問を受けるんですけれども、そのなかには、「孫が病気になった、その病名を聞いて調べに来た」という方もいらっしゃいます。また、「治療中の病気がある、術後の検査でちょっと気になることをいわれたので、図書館に調べて来た」というような方もいらっしゃいます。

この(医療・健康情報コーナーの)奥には「闘病記文庫コーナー」を設置しております。闘病記も医学文献と同様に重要な情報源だと思います。同じ病気と闘う患者さん,また患者さんの家族の方々が書かれた手記がこちらにあります。



図9 医療・健康情報コーナー

「闘病記で生きる力を!」というパンフレットを当館で作成して配布をしているのですが、これは脳卒中で倒れて左半身に麻痺が残った方が気力を失っていらっしゃった。その方が闘病記に出会って前向きになって、生きる希望を得られた。これは実際に図書館に寄せていただいたエピソードなんですが、その方のストーリーを漫画にさせていただいて配らせていただいております。こちらはつくってから、おそらく10年ぐらい経ってきていると思います。今年、新しいエピソードを募集するという企画も始めているところです。

いまご紹介したようなもの以外、医療情報や闘病記を、図書館でしっかり情報提供してゆく ということはもちろん大切なんですが、やはり連携もこの分野でも必要だなと思っています。 昨年と今年と新型コロナの影響もありまして、担当者会議(医療情報サービス担当者会議とい うのを開催しているんですが)も実施ができてないのですが、こういう会議を県内でもつ機会 があります。鳥取県内では医学部のある大学が一つあり、鳥取大学。病院図書室は、鳥取県内 には二つの県立病院があります。そこには図書館の司書がいます。そして、もう一つ鳥取市立 病院という病院がありますが、こちらの図書室にも司書がいます。この司書がいる三つの病 院、公共図書館の関係者が集まっています。このなかでは、日常的に困ったこと、情報交換を 中心にやっているんですが、「業務上よく利用するウェブサイトはなんですか」というようなご 質問があったり,「患者会の資料を入手する方法ってどんな方法がありますか」などの情報交換 をしています。病院図書室に直接、本を県立図書館から貸し出しをするということもありま す。県立病院は二つありますけれども、病院に本を送っております。病院図書室は専門書以外 の本というのはそう多くはないもので、患者さま、そして医療関係者の方が読みたい本を県立 図書館からお届けしております。年間その二つの病院で、だいたい 3.000 冊程度の貸し出しを 現在しています。実際には、どんな本が借りられるかというと、例えば折り紙の折り方という ような本もあるわけです。退院するまでの間にリハビリで使いたいということで。また入院中 の楽しみとして、小説が読みたいという方、退院後の生活のために料理の本をお借りになると いう方もあります。そういったリクエストにもお答えすることができます。(また、病院図書室 には) 気持ちが和らぐ本のコーナー「ほっとこーなー」があります。これは 2017 年からスター トさせたものですが、鳥取県立図書館で本をセレクトさせていただき送っています。3ヶ月ごと に本を入れ替えます。一度に50冊程度の本を貸し出しします。手軽に手に取って読みやすいよ うな本をセレクトして、ほっと心が安らいだなぁと思っていただけたらいいなと思い、本をセ レクトしてお送りすることも始めております。

私どもの図書館、「鳥取県立図書館のミッション」というのは「県民に役立ち地域に貢献する図書館」です。第1から4の柱がありますけれども、いままでの活動というのはこういったミッションをもとに取り組んでまいりました。やはり鳥取県という地域に貢献することが非常に重要だと思い、活動をしてきております。

鳥取県の将来人口の推移ですけれども、先ほどは現在の人口を少しご紹介したんですが、やはりさらにどんどん減ってゆく、地域の将来に目を向けると、そういう状況がみてとれます。 令和2年度には55万人と紹介させていただきましたが、令和27年度には45万人程度に減ってゆくということになります。

こうなってくると、やはり地域の課題というのは、少子高齢化と、人口減少ということは、

避けては通れないと思います。じゃあ、この状況に図書館はどう対応してゆくのかということになります。おそらく(図書館で取り組んでいる)サービスは変化してゆくものだと思っています。例えば、子育て支援も移住者の方がどんどん増えておられれば、もっと鳥取県のなかで子どもが楽しめる観光地の情報というものが欲しいと思われる方も多くいらっしゃるかもしれませんし、病院の情報についても、もっと細やかに知りたいという方もあるかもしれません。そういった地域の状況に合わせてまたサービスを変化させていくことも重要だと思っています。

そこで、地域ということを、最後にお話しをさせていただきたいと思います。鳥取藝住実行委員会という団体がありまして、そこと連携し図書館のなかで行った事業があります。「子どもの頃の場所と風景を思い出す」という企画だったんですね。参加者の方々がそれぞれの記憶を、まずテキストに起こします。それを参加者同士でお互いに読み合います。そうすると、それを読んだ方が、「ここに書いてあるものっていうのは一体どういうものですか」とか、「ここに書いてある伝統行事って一体どんないわれがあるものなんですか?」とか、いろんな質問がきます。ところがやはりご自身の記憶のなかで書かれたものであっても、実はそういった詳しいところまではよく知らないということも、改めて気づかされる。そこで図書館の郷土資料で突き合わせながら、その当時の記憶と、実際それってどういうことなんだろうと資料で調べてゆく、ということをされました。このときに、地図やまちの歴史に関する本、写真集などもみていただいたりしました。こういう資料をみながら、いろいろディスカッションをしてゆくということをされていました。

また、大学の授業の一環として使っていただいたこともあります。このときは、「図書館の周辺の地域を文化的な拠点エリアとする」という大きなテーマがありまして、三つのグループに分かれてディスカッションをされました。中心市街地を歩いて書店に立ち寄ったり、また工芸店に行ったりしながら図書館まで来られます。そして、その地域が抱える問題を分析して、学生の視点で地域の将来像を想像して提案していくことをされました。このときに、図書館の本をいっぱい使ってくださったのですが、学生がそれぞれで考えて、どんな資料が使えるかを、図書館のなかから選んできてくれています。私にはちょっと想像できないようないろんな視点から資料が集まってきていました。最終的にこの三つのグループは、後日プレゼンをされたのですが、そのなかには、「おにぎりからにぎわいを」というような、なかなかおもしろそうなテーマも発表されました。

二つの事例で私が感じたのは、図書館という場所ですね。「場所」に集まっていただいて。図書館にはたくさんいろんな情報が集まります。データベースもありますし、本もありますし、雑誌もあります、新聞もあります。そういったものをみんなでみながら、わいわい言いながら自分たちの考えだとか問題点を整理する。そういった場面に使っていただけたな、というふうに思っています。

いざというときに図書館がレファレンスという機能を使って情報による支援を行うことは, 図書館の重要な役割,責務だと私も思っています。ただ,いざレファレンスの力を発揮するためには,資料が重要になります。あらゆる分野の資料があること,過去にさかのぼってみられる資料があること,図書館の強みだとも思っています。それに加えて,郷土資料も欠かせない ものだと思います。過去の歴史も、災害の歴史もそうです。文化や伝統もすべて地域情報です。いま、コロナ禍で世界中が混乱のなかにいますけれども、歴史的なパンデミックから学ぼうと考えて、スペイン風邪がとりあげられたりすると、やはり図書館にはスペイン風邪に対する質問がやってきます。「スペイン風邪が流行した頃、鳥取県はどんな対応したんですか」とか、「当時の新聞がみたいんです」っていう質問も今年になって寄せられています。このようにいろいろ地域資料も手がかりに調べることにはなりますが、調査をしながら、図書館しかできないことがあるんじゃないかな、と感じています。

情報を求める人に情報を届けたいと思っていますが、図書館だけで活動してもやはり限界がある。それも感じます。地域で活動する団体とか組織、そういったところと連携をしながら進んでゆくこと、取り組んでゆくことが、図書館にとって、レジリエンス、そういう力を発揮できる場所になるんじゃないかなとも思います。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございます。

# (永田)

ありがとうございました、三田さん、そして先ほど柴崎さんのお話を承りました。 例年ですとここで質問紙など私どもが配って書いていただくというような感じになるんです が、ご質問のある方はチャットに書き入れていただきたいと思います。しばらく休憩ですの で、その間を使っていただいて結構です。どうぞよろしくお願いいたします。

# ディスカッション

#### (永田)

はい、それでは、時間になりましたのでディスカッションを始めたいと思います。 すでにいくつか質問とか感想がきております。

当初、柴崎さんの講演に対する感想と、それから質問が一つ、簡単な質問がきてました。「図書館の跡地は現在どうなってますか?」って質問がきてますけど、この辺りで簡単にお答えいただいて、議題の中身に入ってゆきたいと思いますが、いかがでしょうか、柴崎さん。

# (柴崎)

どんぐり子ども図書室、どんぐり・アンみんなの図書室、あれはいま現在は名取市の歴史民 俗資料館として生まれ変わって使われております。

#### (永田)

ありがとうございました。

それから同じく、名取市さんへということで支援関係ですかね、「石狩市それから、石狩市と 関係する沖縄の恩納村さん、さらに輪島市さんだとか、そんなネットワークがあるようです。 そういったもの(つながり)を感じ取った」という、コメントがついてました。

次に、感想と若干質問の部分があるものでありますが、これはやっぱり名取市の柴崎さんに向けたものかと思いますが、「被災地の子どもたちの心の回復というところに関心があります。 大川小学校の遺族会の活動についてこの半年、佐藤敏郎さんを通じて、これは心の素地、心の素地を育てるにはコミュニティの力がとても必要なんだなと感じています。図書館がそのようなコミュニティの核になってゆくのはすばらしいなと思います。一方で、震災後に生まれた子どもたちがすでに小学生になっています。そうした思いをどう伝えてゆこうとしてるのか、ここがお伺いできればと思います」というのがきておりますが、柴崎さんコメントをいただけますか。

#### (柴崎)

はい。私たちも、子どもたちの心の回復についてはすごく大事に考えていました。震災直後、一番に大切にしなくてはいけないサービス対象は子どもたちだと思っていました。もちろん大人も大事なんですが、まず最初に取りかかりたかったのは、子どもたちへのサービでした。先ほどの話のなかにはありませんでしたが、日図協(日本図書館協会)からの支援で、北海道から使わなくなった BM をもらいまして、それに子どもたち用の本を入れて、子どもたちに楽しんでもらったということがありました。その後、支援で建物を建てるという話が出たときに、子どもたちが安心して本を読める場所をつくりたい、まずは子どものサービスから始めたいということで、子どもの図書室をつくりたいという私たちの気持ちと、ユニセフの支援をしたいという気持ちがうまくマッチングして、子ども図書室ができあがったのです。そのようなわけで、子どもに対する支援というものはとても重要だと思って取り組んできました。

震災から間もなく 10 年になるわけですが、そのとき生まれた子どもたちはもう小学生になりました。震災の記憶がない子どもたちに、震災のことをうまく伝えてゆかなくてはいけない

と。図書館がすべてできるわけではありませんが、図書館もそのお手伝いができるというよう な立ち位置にいたいので、いま、そのような思いをもって子どもたちへのサービスに取り組ん でいます。そんなところでよろしいでしょうか。

#### (永田)

ありがとうございました。私が先ほどちょっと資料にはさんだ、ゾッリ、ヒリーによるヒントですと、個人のレジリエンスという問題を考えるときに、自己回復力とか、自己統率力ということがいわれるんですが、子どもたちの場合は、そういったものが未発達の段階ですし、またそれを養ってゆくっていうのが、難しいと思いますが、図書館がそういう場所になってゆくことが大変大切だなと私は感じます。その意味で図書館はレジリエンスを育てる場所かなと思います。

次に鳥取県立図書館に参ります。

質問が飛び込んだ順序で、いまのところやってます。以前のシンポジウムのように、ある程度の質問が揃ってそれを分類してということじゃなくて、チャットに入力された順にやっております。

「鳥取県立図書館のサービスにとても注目してます。病気と向き合うための情報発信,とても 心強く思います。重い病気を抱える家族の看護をしているとき,そうした情報は,藁をもつか む思いで,どれだけ心強いでしょうか。お話を伺って,とても心を動かされました。ありがと うございました」とおっしゃってます,これは質問というよりも感想ですね。

「鳥取県県立図書館さんへ」ということで、「レファレンスの、特にビジネス支援サービスのときに感じられたのですが、このコロナ禍になり、いろいろサービスを調整せざるを得なくなって、大変かとお察しします。この手のビジネス系レファレンスには、たとえ回数を分けたとしても、1回当たりにかかる時間が非常に長くなってしまいそうですが、鳥取県さんは現在どのような工夫をして乗り切っておられますか。ちなみに当館では、建前上、対面のレファレンスサービスは 15 分以内、データベースとインターネットは 1 時間以内、新聞、マイクロフィルムは 2 時間以内といった制限を設けさせていただいております」、いかがでしょうか三田さん。

(三田)

はい、ご質問いただきましてありがとうございます。確かにいま、コロナ禍で当館でも、レファレンスについても時間の制限、ある程度そうです、長くならないというようなところで、 ご理解をいただいて使っていただいているところです。

以前からやはりそうなんですが、やはりレファレンス、ビジネスに関係するレファレンスは、割と長くなったり、すぐにその場では解決ができなかったりっていうことがあります。でも、そういったときには、お話を聞いて、そのときにお出しできる情報はみていただくということをしますが、それ以降については、後日、調査の上、ご連絡をさせていただいています。(永田)

よろしいですか。お二方にご質問等なさった方は、以上のような回答になにかコメントございますか、もしあったら手を挙げていただけるとありがたいのですが。

なければ、次のご質問です。柴崎館長へのご質問として、「早朝の一部開館を始めたのはどういう理由からでしょうか。やすらぎ、つどい、ひろがるということで、つながるということで

しょうか。図書館は日常を伝えているというレジリエンスというような意味なんでしょうかというふうに理解しました」。ちょっと、漠とはしてますけども、ともあれ「一部開館を始めたのはなんのためですか」ということで。

#### (柴崎)

はい、お答えします。これは単純に、名取駅前に建ったからっていうのが正直なところです。そもそもこの一部7時半を、図書館の方で「したい」と言い出したわけではなくて、実は当時の市長の考え方でした。「駅前に移るんだったら、名取駅は県内でも3番目に乗降者が多い駅だから、朝から図書館サービスできるように7時半から開けなさい」といわれたのが本当のところです。ただ、それには私も同じような考えだったのでやらせてもらいました。

# (永田)

そのような形で人々が寄ってくださるっていうのが結果として,図書館にとってはコミュニ ティを支える活動になってるかと思います。

質問は、ただいまのところ以上です。いつもとかなり違って、質問を出される方が少ないんです。

柴崎さんのほうのお話のなかで、復興を支えたものっていうか、復興の後、それを後押ししたものをおっしゃっていましたね。一つは、柔軟で楽観的に考えられたっていうのがあったこと、もう一つは、新たなコミュニティのつながり、それは本当にさまざまな形で出てきてコミュニティの形成というか、支え、そして実際に成し得た喜びが、今回後押ししてくれたとおっしゃってました。大震災という不幸があってコミュニティがもっと密になったと思うんですが、図書館の側からどんな働きかけをするようになったか。そこのあたりを教えていただくと嬉しいんですが。何回も会合をやろうとしたのは、新しい図書館をつくって、間もなく開館するために集まりを仕立てたということですか。

#### (柴崎)

はい、そうです。紹介したワークショップは、新しい図書館の開館に向けて開催したワークショップです。

#### (永田)

ところが、その開館を紹介しにいったところで、いろいろ新しい事実に出会い、それからそ こに新しいことや人とのつながりができたということなんでしょうか。

# (柴崎)

はい、そのとおりです。いろんな形のワークショップを、開催してゆくうちに、図書館のもっている課題がいろいろみつかりました。それを解決しながら新しい図書館の建設に結びつけました。

# (永田)

鳥取県立図書館でも打って出るというか、情報を、図書館はこういうことをやっているんだ よという形で、情報を発信することを強くおっしゃってましたね。その点では名取市図書館も 同じような姿勢をとっているような感じを受けます。

また三田さんのところは、情報発信するだけじゃなくて、いろんなサービスを充実させて、 成果を次につなげてゆくとかなさってます。そしていうならば分厚いサービスをなさってるか らつながってると思います。しかし、個々の図書館では、なかなか情報発信してもレスポンスがつかめないとか、いろんな悩みがあると思うんです。そのあたりは実際に動いちゃったほうがいいようで、名取市さんの場合も、そういう会合をやったことによって、なにかが出てきてますよね。特に、そのあたりさらに言葉を添えたほうがよいことはございませんか。

#### $(\equiv \boxplus)$

サービスの充実のあたりも触れていただいて、ありがとうございます。私たちがやってきた 姿勢というのは,私の前に事例を発表いただいた,名取市の柴崎さんからのお話にも,あぁや っぱり同じなんだなと思うところがありました。とにかくやってみるっていう話があったと思 うんですが、やってみて失敗したらやめるっていうね。考えて考えてやらないよりは、やっち ゃおうよっていうのが平成 16 年ぐらいからのずっと動きでした。それを特に恐れてはなかった ので、次々と結果としてなんとなくいろんなサービスができてきたようにみえたっていうの は、そこはあるかもしれません。それを始めるときに思っていたのも、たしかにレスポンスっ ていうことはあるんですけれども、確かにそこはつかみたいところなんですが、一つ、いろん なサービスをしてゆく上での、広げてゆきたい、もっと知ってもらいたいっていうときに、一 般の方々にどれだけ、どこにいってなにをいえば広がるんだろうかっていうのは、やはりみえ ないところもあって、要するに、対象が大きすぎるので、どうしたらいいんだろうっていうの もありました。そういうときに、それだったら、例えばビジネス支援であれば、商工会議所と かそういった団体に、しっかり、わかっていただいて図書館が割と使えるぞって、言ってもら うことのほうが、もしかしたら広がるんじゃないかなっていうようなこともあって、連携とい うところが生まれてきた。それを他のサービスでもやはりそうで、看護協会のほうに、看護師 さん向けの情報収集の研修会っていうようなところに講師に呼んでいただいたりして,そこで 図書館とこういうことできますし、皆さんでもこういう情報収集できるんですよってお伝えす るほうが、ピンポイントに広まってゆくっていうことも経験しながら、いまの形のサービスを やっているという感じですね。ちょっと言葉足らずですが、そのように思っています。

県立図書館でそういったサービスを展開する意味というのは、モデルをつくることだと思ってまして、県内の図書館に、こういうサービスでこういうやり方すればできるなら、うちでもやってみようかなって思ってもらえるモデルを示してゆくことですので、常に挑戦してきたというのがいままでの流れだと思っています。ちょっと補足になってないかもしれませんが、私からは以上です。

#### (永田)

鳥取のケースをみてると、見える化が上手だなと思いますね。「なんとか大賞」とか、あるいは、実際にサービス効果が出たところを見える化してるような気がしますね。そのへんが理解され、図書館を皆さんが支えてくれるのかな、と思うんです。

あと名取市の場合も、実際に図書館行ってみますと、皆さんがずいぶんくつろいで、そして 図書館をうまく使ってるという様子を拝見し、市民の方に親しまれてる図書館だなと受け止め ました。見える化を実際の運営で、さまざまなさってると思います。

いま,見える化といえばですね,インターネットでわりと図書館も配信してるじゃないですか。それと同時に,鳥取県立では館内の各コーナーで,こういったものがあるよってリアルに

もみせている。そういう、二重三重に見える化してるっていうところが気づいたんですが、そのへんはどういうお考えで、どうしてそんなふうになさってるんでしょうか。県立図書館ですから住民の方が、県全体の方が県立図書館に足を運ぶってことはできないと思うんですが。

#### (三田)

そうですね、先ほどご紹介させていただいたなかでも、コーナーの写真をみていただいたと思います。県立図書館に来館している方は、まずは自分が興味がある本は自分で探されるんですが、来館している方であっても、その際にこんな本や写真があるってなかなか気づかれなかったりします。で、コーナーをつくるっていうのは、一つそういう意味では、非常に見える化という意味で、説得力のあるというか、私たちが届けたいメッセージは届くようにというのがあって、コーナーをまずつくっています。

それに伴ってレファレンスが少し変わってきたとか、問い合わせが増えたみたいな話もしましたが、やっぱりそれがなければ、なかったのかなと思います。コーナーより少し規模を小さく考えてみると、図書館は日常的にいろんな小さな展示をしますよね。展示をすることによって、いままで「あれ?まったく動かなかったのに!」っていうような本が貸し出しに出ていったりするわけです。やはりそういうふうにみせてゆくっていうことは、図書館のなかをコーディネートしてゆくというか、発信の場として考えるというのは必要かなと思ってます。

また、いまそうですね、コロナ禍ということもあって、インターネットを使うっていうこともたくさん出てくるんですが、またそことは少し、メッセージがもしかしたら違うのかもしれません。ただ、むしろこの来館されない方には、やっぱりインターネットをしっかり使って情報発信してゆくっていうことは必要だと思いますので、そちらについても、両方やってゆかなくてはいけない、というふうに思ってはいるところです。インターネットについてはちょっとまだ足りてないのかなと、私自身思うところも、細やかにしてないのかなと思うところありますけれども、やはり両方が必要だと思っています。

## (永田)

はい。コロナ禍で、どの図書館もやはりそのデジタルな情報をいかに出してゆくかが課題だということがみえてきちゃったんですが、名取市立図書館としては、カバーする地域はそんなに広くはありませんけれども、柴崎さんのところでも、インターネットで、図書館の情報を出す、あるいは図書館のサービスを出すことはなさってるんですか。

### (柴崎)

インターネットを使って図書館の情報を発するということはやっております。コロナ禍になってからも、現在はやっておりませんが、今年の春先には子どもたち向けに読み聞かせみたいなことをやっていました。おはなし会が、図書館のなかでできなかったとき、図書館に来館してもらうことができなかったときに、限定的にやったことはあります。

#### (永田)

そうです,名取市さんは、コロナ禍で早い段階でおはなし会をなさったということ、積極的 にそういったサービスを展開されているというのを承っておりました。

それで少し、フロアっていうか、ネットでつながってる方々のご発言も促したほうがいいかなと思います。名取市の柴崎さんが新しいつながり、コミュニティができて、その友の会をつ

くったということをお話しになってました。友の会というと、ご参加の図書館パートナーズの 小田垣さんが思い浮びますが、小田垣さんのほうで、なにかご意見というかご発言ございませ んか。いらっしゃるかな?

#### (小田垣)

小田垣です。友の会ですね。関連する私の活動なんですが、いわゆる友の会というのとは、ちょっと性格が違うかと思うんですが。やっぱり市民っていうか、そういう方が中心となって、あの活動するってのはやっぱり、地域活動をもとにした考え方なので、図書館のなかではなく、外からの働きかけっていうのが大事になるかと思うんですけど。なので、あまり図書館という枠にとらわれなくてその、外の地域活動そのものを、図書館のほうに取り込むという発想というか、そういうことがなにか一つ、大事になってくるのかなと思いますね。なんていうかこう、図書館のカウンターのなかで発想すると、やっぱりその図書館のなかに閉じてしまうという感じが、はい。

#### (永田)

それは友の会であろうが、パートナーズのような形の会合であろうが、どちらも大切だとい う意味ですよね。

#### (小田垣)

そうです, そうです。はい, そう感じています。

#### (永田)

柴崎さんところの友の会は、その図書館を支える会合という形で設定されているわけですか。その趣旨のほうを少し、もう少しご説明いただくとありがたいですが。

あの、いまご発言いただいたのは、東京墨田区の図書館パートナーズの小田垣さんのご発言なんですが、小田垣さんのところは、図書館の活動を外から温かくみて、そしてそれをサポートするような形なんですね。図書館活動そのものをサポートするという、もっと広い意味でのサポートになっていますね。

名取市の友の会はいかがでしょうか。

#### (柴崎)

はい、うちの友の会は、「図書館を支え、援けるための活動」、それから「図書館を楽しむための活動」、このようなことを目的にしています。その「支え、援けるための活動」のなかに、友の会でボランティアをするというのがあります。が、友の会に入っているからといって、必ずしもボランティア活動をしなくてはいけないというわけでもありません。図書館を「頑張れ」って応援したい気持ちがある方であれば、誰でも会員になれるし、「図書館でこういう楽しいことをやりたいね」って企画をもってこれるのも、会員さんの一つの楽しみじゃないかなと思っています。一緒にやっているって感じですかね。

#### (永田)

小田垣さんのところと違和感のないものじゃないですか。

#### (小田垣)

そうですね,同じだと思います。楽しむと,図書館を楽しむために集まって,好きなことを したい人がいれば,そこで好きなことをするっていうのが基本的に,コミュニティが生まれる 最初の考え方だと思いますね。同じだと思います、はい。

# (永田)

小田垣さんのところのパートナーズなんかも、結局は、地域が強くなるっていうか、地域の 自立っていうか、そういったものが欲しいというところが、根っこにあるような気がするんで すけど。それは今回のテーマ、レジリエンスみたいなところに、かなり近いのかなと思います が。

# (小田垣)

はい、そうですね。図書館をサポートするっていっても、図書館を活性化するのは目的では なくて、その地域を活性化するのが目的であって、そのための図書館というスペースであった り、資料であったりっていうことを、なにか考え方ですね。

#### (永田)

そうですね。もちろん図書館がうまく運営されてるっていうことは大切なんですが、図書館は地域のためにあるわけで、図書館のためにあるわけではないですから。わかりきったことですけども。

そういう話になってきますと、太田さんがいらっしゃいますから、太田さんにそのあたりの、なにかおっしゃりたいことがあるんじゃないかと思います。太田さん、いかがでしょうか。

# (太田)

ありがとうございます。われわれ、昨年からこのレジリエンスっていう言葉に注目して、活動のテーマとして、ずっとレジリエンスということをいい続けてきました。こういう毎年出している「綴」という冊子も、2020年2月発行のものに「図書館と地域のレジリエンス」というタイトルをつけました。その後コロナがきて、ますますレジリエンスについて考えさせられるということで、今日永田先生もレジリエンスっていう言葉に注目されてこういう、シンポジウムもなさって、名取市さんと鳥取県さんの事例を聞かせていただいて、すごく勉強になりました。ああ、やっぱりレジリエンスが大事なキーワードになってきたなという気がしました。

ここ1週間,先週から今週にかけてレジリエンスを考える上ですごく大きなトピックが二つあったと思うんですよね,図書館の世界で。一つは河野大臣が高知のオーテピアを見に行ったと。僕はものすごく危ないなと思ったんですけどね。行政改革っていう旗印のもとに,県立と市立の合築って,ものすごくいろんな要素を含んでいて難しい話だと思うんですけど。あの大臣ですから(笑),ものすごく単純化して,行政改革っていう旗印のもとに捉えられてしまうと全国的な図書館がものすごく被害にあうというか,危ない目にあうんじゃないのかなと思っていて。実際図書館って,何年か前の,いわゆる事業仕分けでものすごい波を被って,指定管理にもピンからキリまであるので一概にはいえないですけど,指定管理という波が押し寄せてきたわけで。同じような,また,合築だけじゃない,今日お話伺った鳥取県立さんみたいなことをいろいろ頑張っていれば、単純なそんな話はないと思いますが、県立図書館と県庁所在地の図書館の二重行政問題みたいなものって必ず出てくる話で、そういうときにそれぞれの図書館の役割をきちんと、レジリエンスという視点のもとで整理しないと、目先の行政改革っていう波にやられてしまうなと。

もう一つは、西日本新聞だったかな、常滑で前に決まってた話なんだけども、新聞の記者さ んが書いたことによってもう一回議論が沸騰していて、常滑市さんが中央図書館を潰してしま うと。何年か後に議論を始めるみたいなこともいってるみたいですけども。いま、私が全国の いろんな自治体や図書館から相談を受けていると、いくつかの市町村の首長さんが、常滑の例 を引き合いに出して、図書館に急ブレーキを踏むようなことをおっしゃったりとか始まってい るんですね。常滑の例なんてまさにレジリエンスの問題で、名取市さんの場合は震災というこ とで物理的に図書館を失って、そのなかで皆さんが頑張って復興されて、まさにその過程で地 域のレジリエンスが発揮されたのですよね。今日本の図書館の多くは、物理的にではなくて、 もう図書館そのものが行政からみてはお荷物でしかないと。ただ物理的にやられてしまうんじ ゃなくて、もう自治体からみて、見限られてしまうっていう状況が目についてきています。今 回の行政改革で旗振っている大臣の動向と、この常滑で起こった首長さんの判断みたいな事例 が、この後どう響いてくるのかと考えたときに、まさに図書館自身が本気で考えておかないと いけない。名取市さんのように逆に復興のプロセスでレジリエンスな力を発揮していったのだ けど、そのいま名取市さんがなしえているような状態を各地の図書館がつくれているのかどう か。そういうレジリエンスが発揮できない図書館っていうのは、このコロナ禍で酷いことにな ってたりしますから、この後も、自治体の予算はますます厳しくなるなかで、一気に図書館が 消滅していく状況もあるんじゃないのかなって危惧しております。ただその意味でも、それぞ れの図書館が今日お話を伺ったような、いろんな方法を使って地域の住民とのネットワークを つくっていかないと、おそらくいま、多くの図書館が長年の間やってきた、住民サービスの延 長の図書館では、自治体や住民、首長さんには響かないと思うんですね。この先地域の未来に 対して、それぞれの図書館がどこまでコミットできるのか。今日、さかんに課題解決という話 が出てきましたが、課題解決もそうだし、地域の未来像をどうやってみんなでつくっていく拠 点に図書館がなれるかどうか、そういうふうにコミットできてないと、おそらく、この後もの すごい逆風が吹いて、物理的ではない自治体のいろんな状況のなかで、図書館が消えてゆくと いう事態もあり得るんだと、すごく危機感をもってみています。

今日のシンポジウムでお聞きしたような事例というのは、どんどん地域の図書館さんも共有 して、生き残ってゆけるような、物理的な災害ではない、人的なものにも負けないで、きちっ と将来に残ってゆくような図書館になっていってほしいなと、すごくいま思ってるところで す。

#### (永田)

ありがとうございました。大変重要な指摘だと思います。昨今のさまざまな事象に関する議論をみていると、どうも本質的なところがきちっと語られてない。コロナに対応する議論なんかもそうなんですが。テレビのバラエティショーですか、トピックをとればいいというような形で。インターネットの情報もそうですね。

サステナビリティに関しては SDGs が出てですね、さすがに皆おかしなこというのは少なくなったんです。少なくなったんですが、誤解もある。レジリエンスという言葉に関して、政府の翻訳は「強靭化」という訳で、ちょっと違うなという感じもあります。われわれ生きてゆく上できちんと危険を避けて、混乱が来たときにそれに対応できるよう、自然環境に備わる力を

含め、弾力的な復元力を準備しておくというような意味合いでのレジリエンスとはすこしずれます。おっしゃるとおり、行政改革というようなところから、「合理的だ」「効率的だ」というところで、図書館が押し切られてしまうような危機感は、あるかと思いますね。

なんかこの、いまの太田さんのご意見について、つながってる方、ご意見ございますか?遠 慮なくどうぞ。

# (太田)

さっき名取市さんの発表のなかであったのかな、「自立」っていうのは依存先を増やすことだっていう。

## (永田)

鳥取県立のね、最初ね。

#### (太田)

それに尽きると思うんですよね。

#### (永田)

そうそう。

#### (太田)

ワンウェイの住民サービスではなくて、もうもはや住人と双方向で、お互いの依存関係を何重にもつくってゆかないとレジリエンスって発揮できないと思うんで。だから、やっぱり、Win-Win の関係、それは住民と図書館もそうだし、利用者と図書館もそうだし、逆にいうと、行政と、だから市役所とか役場と図書館の関係もそうだと思うんですね。いま一番問題なのは市役所、役場と図書館がWin-Win の関係がちゃんとできてない。単に予算が落ちてくるのを待ってるだけだと一方向になってしまうので。だからそうではない。市役所の職員にとっても、図書館が大事であるというWin-Win の関係をどうやってつくってゆくのか、相互依存の関係をどうやってつくってゆくのかっていうのがすごく大事なのかなと思います。

# (永田)

人間関係でもそうですよ。友人だとか、その自分の周りを、なんとなく一人ぼっちになって しまうことは非常に危険なことです。子どもたちで起きている問題もそうだと思います。

さっきのそのお話のなかにもう一度戻ってきますと、鳥取県立の三田さんのお話のなかで、 地域の課題に関して、人々が寄ってくれて、その課題を出すという話がありました。これはとっても私は大切な、レジリエンスからいうと大切なところをいってるなと思いました。人々が寄ってくれて、そして自分たちの記憶、地域の記憶を確かめて、そして時代が違うから同じ街はできないかもしれないけど、新たな街をつくる。あるいは、昔あった災害を記憶として残しておく。「だからここには、家建てちゃいけないんだよ」とかいうようなことをちゃんとアーカイブするとか、図書館に置いておくというような意味合いもあるし、もう一つは、私は、人々のつながりという意味で、ソーシャルキャピタルみたいなものが、育つのだろうなあと思っています。ですから、この鳥取県立の事例を伺って、ああ、なるほど、鳥取県立はこういう形でその地域を支えてるんだなと思いました。そこでですね、三田さんには少し、もう少し地域を支えるためになにか他にもやってらっしゃることがあると思うんで、その事例を少しあったら教えていただけませんか。 (三田)

すべていろんな取り組みについて、最初にも申しましたけど、ミッションっていうなかで、私たちもいろいろ考えて行動をしているっていうことを思うと、いろんな活動が、確かに、「地域ではどうか」っていうところを地域の課題をなんとかして解決したいっていう思いで、取り組んでいるっていうのはそうなんですね。それは、ビジネスもそうです、医療・健康もそうなんですけど。最後に紹介した事例っていうのは、実はそれは図書館主体で動いてるものではないです。これってもしかしてちょっと、小田垣さんおっしゃってたところにも、もしかしてつながるのかな、なんて思って少し聞いてたんですけど。図書館のなかだけにいても、ちょっとそこでジタバタしていてもなかなか寄ってくれない人たちがいてそこで、他のどこかとつながって、今回は大学の事例を出しましたけど、そういうところとつながることで、本当に、来たことのない子たちがいっぱい図書館には来てくれました。で、そのときに一応聞くんですね。「利用者カード持ってますか。また本借りれるけど、どう」なんていうと、もう8割くらい持っていないと。「あ、こういう子たちが来てくれたんだな」っていうのが、かえって嬉しかったりしています。

だから、地域とつながるっていうことっていうのは、一つは図書館でなにか企画しようと思っても難しいんですけど、そういう地域のなにか団体とかとつながってゆくっていうことで、さっきみたいな活動が実現できるのかなと思います。これがその答えになっているかはわかりませんが、今年、県立図書館で30周年の記念の年を迎えました。このコロナの年だったんですけれども。一応リモートでのイベントを開催したり、集まれる人だけは集まるっていうようなことをやったんですけど、そのなかで、図書館の近くというか、図書館を出たところに中庭のようなところがありまして、そこで一箱古本市っていうのをやりました。それは図書館のなかで実行委員会をつくって、それで地域の人たちが、ダンボール一箱の本を売ったりして、するイベントなんですけれども、そういうイベントをちょっとやってみたりしました。これが地域の課題を解決するということではないのかもしれませんが、そういう人とのつながりをつくる、また新たな視点でつながりをつくってゆくとか、交流をつくってゆくっていうことを少しずつ始めているというところです。私たちもいまその「まちづくり」とか、地域の課題を解決するために、なにか図書館で一緒にできないかなっていうのを模索しながらやっているところっていうことなので、これからそういう事例がもっとどんどん話せたらいいなと思いますが、いまのところは模索中です。

#### (永田)

ありがとうございます。あと、なんというのかな、若い世代と古い世代、世代間のつながり みたいのはありますか。

(三田)

世代間ですか。

(永田)

人生の先輩が、若い人に伝えるようなサービスってありますか。

(三田)

そうですね、その具体的にそういうところを意図したものではなかったんですけど、図書館

主体ではなくコラボレーションさせてもらった企画のなかに、地域の家庭で眠っている8ミリ フィルムを集めて、その映像を残そうということを事業としていらっしゃる団体があったんで すね。その方々が図書館に来られて、図書館と一緒になにかできないかなという相談がありま した。うちとしては非常におもしろい企画だと思いましたので、ちょっと一緒にやりましょう ということで、コラボさせていただいて、そのときなにをしたかっていうと、その団体の方々 は、その8ミリフィルムのデータを映像化して、DVDとかで流して、流すということができる っていうことだったので、じゃ公開鑑賞会をやってみましょうということで、本当にただの8 ミリフィルム、家庭のビデオなので、映像なので、淡々とした映像が流れるんですけど、その なかに、街の様子が映っていたりとか、あともういまはないような百貨店が映っていたりと か、そういうものが残っているわけですね。だいたい昭和30年代、40年代とか、その辺りのも のなんですけれども、当時を知る人たちは見に来られます。でもそのなかに若い子たちも来ら れていて、その映像をみながら、その当時を知っている人たちは、そのときの様子を語られる んですね。で、その話を聞きながら、そのまた若い子たちはそれで、感じたことだったり、そ うだったんだなっていうような感想を述べたりして、そういう場面をですね、一つの企画のな かで、体験しました。そのときには図書館でしていただくので、当時の様子がわかる写真を出 してみたりだとか、本を出してみたりということも合わせてやりましたけれども。で、一つお もしろかったのは、そういう場面でいろんな情報交換ができたなあということも一つあったん ですが、実はそのイベント告知するために、館内でずっと映像を流し続けたんですね。展示コ ーナーみたいなものをつくって。懐かしいブラウン管テレビを持って来てくださって、そこで はずっと映像が流れていて、そこで立ち止まってみる方もあって、「立ち止まってみられるな ら,もしかしたら感想を書いてもらえるかもしれない」っていうことで,感想を書くノートを 置いたんですね。そしたら思いがけずいっぱい書いてくださったりして。そういうふうに、あ の、思いがけない、図書館の資料ではなかった部分ですね、その映像なので。ここから生まれ てくる,それこそ世代間の交流というか,交流ですらないことかもしれませんが。というよう なことが実際はありました。すごくおもしろい体験でした。

#### (永田)

まさに図書館があるからできることだと思うんですよね。それをね、記憶を残して、個々に 記憶を残して、必ずしも図書館が所有しなくても構わないわけで、図書館という場を通じてみ んなで共有できれば、そこになにかイメージのコミュニティというものができてくると思うん ですよね。そういうコミュニティが異常な事態に関して、それなりの対応ができるというよう な気もします。そんな意味で、ぜひそういった活動を、鳥取県立図書館さんだけではなくて、 どこでもやっていただきたいような気がします。

もう一つちょっと印象的な話なんですが、名取さんのほうでは、「図書館の絆まつり」ってい うのが一つのきっかけだったとおっしゃってました。それから、鳥取県立では「なんとか大 賞」、なんでしたっけ。

#### (三田)

「夢を実現しました」です。

# (永田)

「夢を実現しました大賞」。なんかどちらも、ちょっと非日常的な感じなんですけども、その後の図書館の動きをプッシュするというか、機動力になってますね。絆のほうは、なんかこう、「できてしまった」ということなんでしょうかね。「夢を実現しました大賞」、最初聞いたときは「なんだこれは?」と思ったんですけどね。なにがあったんですか。

#### (三田)

「夢を実現しました」大賞ですか。ビジネス支援をはじめたときに、公共図書館で質問をしてちゃんと答えてくれるんだろうかとか、役に立つんだろうかっていうのが利用者の方、県民の方にもなかなかわかりにくいんじゃないかなっていうのはありました。私たちもぜひ、どう活用されて、図書館を使っていただいて、得られた情報っていうのが、本当に役に立ったんだろうかって知りたいなっていうところからスタートしているっていうところです。図書館の機能っていうのは、本を読まれるとかそれだけじゃなくて、いまは図書館を場所としていろんな活動が展開されています。相談会もあれば、セミナーを開催したりとか、いろんな情報を得られるなかで、そういったものを使って、なにかヒントを得られて、それが開業だとか、経営改善でも構いません。なにかに役に立ったというところを寄せていただけないかなということで募集をして、そしてそのなかから優秀な作品と判断したものについて表彰を行っています。受賞者の方のそれぞれのストーリーは漫画にさせていただいています。

#### (永田)

堅苦しい話をしますとですね、図書館の活動の成果評価っていうあり方があります。成果評価はとても難しいです。でも簡単にあの「夢を実現しました大賞」は、とても明確な成果評価だなと思いました。実は、まともな成果評価っていうのはほとんどないですが、あれは成果評価ですね。

ということで、この二つの事例を今日はお話しいただいたんですが、二つの事例にはかなりいろんなレジリエンスを支えるアイディア、そして実際の活動があったように思います。例年のように質問でもって議論が終わってしまうということは今年はありませんで、私どももお話しをすることができました。皆さん、難しそうな顔をしてる人もいますし、ニコニコしてる人もいますが、最後になにかこれだけは、いっておきたいっていうのはありますか。

#### (太田)

すいません1個質問。これってあの、夢をかなえましたっていう、夢をかなえた図書館は県立図書館だけなんですか、県下の市町村の図書館で、こんな夢をかなえたっていうのでも応募できるんですかね。

#### (三田)

はい, 県内の市町村の図書館であれば大丈夫です。実際に, 受賞者のなかにも県内の図書館 を使った事例というのが入ってます。

# (太田)

あの鳥取県立さんが、県内の学校図書館さんに児童書全買いして公開して見計らいみたいな の、やってますよね。あれはすばらしいなと思っていて。さっきのお話で、これからやっぱり 市町村の図書館すごく大変だと思うんで、県立さんが、そうやってこう、いままで培ったノウ ハウをぜひぜひ市町村におろして, 鳥取県内の図書館全部が生き残ってゆけるように支援して いただけるといいなと思います。

#### (永田)

はい。都道府県立図書館が市町村立図書館とは違うんだよっていう典型を示しているのは, 鳥取県立さんがですね,本当に頑張っていらっしゃると思います。

他になにかございますか。

最後に柴崎さんに一つ、ご感想でも述べていただくとよろしいかと思うんですが。

# (柴崎)

はい、先ほど図書館の生き残りという話が出ましたけども、私もあの新しい図書館をつくってゆく過程で、危機感っていうほどの大げさなものではないのですが、ちょっと引っかかるものがあって。実は名取市は、仙台市の南側で、反対側の北側に多賀城市さんがあるんですね。私たちが準備しているときに、多賀城市さんが指定管理ですばらしい図書館をオープンさせました。で、うちの議員さんたちも、ああいう図書館が欲しいと言い出したらどうしようかなって。指定管理の図書館をすべて否定するわけではありませんが、名取にはちょっと合わないんじゃないかなっていう思いがあったので、そのためにはどうしたらいいのかっていうことを考えたときに、やっぱり地域を巻き込む、市民を巻き込んで一緒に図書館をつくってゆけば、それが図書館の生き残りにつながるんじゃないかと、そう思いました。友の会設立という方向に、図書館のほうで舵を取っていまに至っている、そのことを一言付け加えたいと思いました。

#### (永田)

おっしゃるとおりです。ありがとうございました。今回のテーマはレジリエンスということではありますが、図書館のサステナビリティという観点も視野にあります。だから図書館をどういうふうに支えてゆくか、また図書館は、図書館のためにあるというよりも、地域のためにあるわけですから、地域をどう支えてゆくかを引き続き考えてゆきたいと思います。

時間を過ぎてしまったようですので、このあたりで締めさせていただきます。本日は皆さまありがとうございました。皆さん、柴崎さん、三田さんに、御礼の意味を込めて拍手をお願いします。それでは失礼いたします。どうもありがとうございました。